

「富岡鉄斎と近代の日本画」展によせて

正気、邪を駆る—富岡鉄斎「朱描鍾馗図」
(1907年)と東アジアの鍾馗図について

無病息災への願いは古今東西変わらず、人々はその想いを神仏などに託してきました。本稿では富岡鉄斎(1836～1924)の作品を通して、東アジアで辟邪神として慕われてきた鍾馗を描く絵画をご紹介します。

鍾馗信仰の始まりは、中国の唐時代まで遡ります。玄宗皇帝(在位712～756)が病に伏し、毎晩夢に現れる悪鬼に悩まされるも、ある日の夢に鍾馗と名乗る大男が現れて悪鬼を退治し、病は癒えます。そこで玄宗は、宮廷画家の呉道玄に鍾馗の姿を描かせ、以後災禍を退ける辟邪の護符として、その図像は珍重されるようになったといえます。当初は旧暦の年末年始、のちに毒虫や疫病が流行する頃にあたる端午節(旧暦五月五日)にも祀られるようになり、今日も民間で篤く信仰されています。なお日本には14世紀頃に伝わったとみられ、室町後期の祥啓や雪村(図1。「鍾馗図」個人蔵)の鍾馗図が残ります。更に鍾馗をテーマとする能の他、江戸後期頃より近畿地方を中心に家屋の屋根に置かれるようになった「瓦鍾馗」(図2)などは、日本の芸能から民間信仰まで、鍾馗が深く根差していることを窺わせます。

鍾馗の姿は、破帽に袍服をまとい、剣を携え、ボサボサの髪と豊かな髭、恰幅の良い体格、ぎょろりと大きな眼とい

た、諸悪を打ち滅ぼさんとする迫力あるイメージが一般的です。中国の明時代以降は、「鍾馗出蠟図」「鍾馗嫁妹図」等といった画題や、明の文人画家文徵明(1470～1559)による「寒林鍾馗図」(図3。挿図は部分図。台北國立故宮博物院蔵)のような、必ずしも武勇を強調せず、礼節ある官僚のような佇まいや滑稽味のある図像も描かれ、鍾馗が文人エリート層から民間に至るまで、広く慕われてきたことが窺えます。

さて富岡鉄斎は、生涯で少なからずの鍾馗図を描いています。現存作例の多くは、端午の節句に際して、あるいは知人の家の子への贈り物として描かれたものであることが自賛等からわかります。その中には朱墨で描いた所謂「朱鍾馗図」が多数あり、更に鉄斎はその画の多くについて、清時代の画家・高其佩(1660～1734)に倣ったと述べています。この高其佩は、指先や爪などで画を描く「指頭画」の第一人者として著名ですが、鍾馗図の名手としても知られました(図4。「怒容鍾馗図」遼寧省博物館蔵)。鉄斎による倣高其佩鍾馗図の一作例として、当館所蔵の「朱描鍾馗図」(「展観のお知らせ」挿図参照。明治40年[1907])があります。本図は、懇意にしていた三津浜(愛媛県松山市)の近藤文太郎氏が、五月五日にチクワを贈っ

てくれたので、その御礼にと描かれた作です。画中には、大きな眼に豊かな髪髭、口をへろ字に曲げ、右手で剣を、左手で小鬼の頭髪をむんずと掴む、どっしりとした佇まいの鍾馗が描かれます。また鍾馗の冠には、魔除けの意味を持つ菖蒲の葉が挿されています。ほぼ朱墨で描かれますが、鍾馗そして鬼の瞳には、黒い墨点を打っています(図5)。画面右上の自題には「正気驅邪」、すなわち正気(=鍾馗)が邪を追い払うという語呂合わせの格言とともに、本図を五月五日、高其佩の説話に倣って描いたと記しています。この高其佩のエピソードとは、其佩は毎年五月五日の午前11時に朱鍾馗図を複数描き、正午になるとその画に瞳を描き入れて、画を求める人々や親族に配り、更にそうした朱鍾馗図の中には、まれに瞳を黒い墨で点じた作があったというものです(清・高其佩撰「指頭画説」)。この話を、鉄斎は市河米庵(1779～1858)『米庵墨談』等を通して知っていたようです(鉄斎「鍾馗図」明治45年[1912]箱蓋裏墨書、鉄斎美術館蔵)。「朱描鍾馗図」が、制作の時刻と段取りまで忠実に踏襲したかはわかりませんが、少なくとも鍾馗(さらには小鬼)の瞳の墨点は、高其佩の画を意識したといえるでしょう。また画風に着目するならば、本図は指頭画ではなく筆画と考えられますが、荒々しい筆のタッチに、指頭画の味わいを再現しようとしたとみられることもできます。実際に鉄斎が、どのような高其佩の画を参照してこれらの鍾馗図を描いたかは判然としません。しか

し彼は光緒12年(1886)款の中国版画「朱鍾馗」(鉄斎美術館蔵)のような作も所蔵し、様々な書籍や書画作品などを通して、中国の鍾馗文化、過去の画家への敬慕のもとに、こうした鍾馗図を描いていたと考えられます。

もちろん鍾馗は、前述したように日本でも端午の節句などでお馴染みの、親しみ深い神様でした。朱鍾馗も、江戸の葛飾北斎「朱鍾馗図幀」(図6。ボストン美術館蔵)などからわかるように、魔除けの図像として日本で知られていました。鉄斎もまた、敬愛する高其佩に想いを向けながら、幼い頃から親しんだ鍾馗のイメージに日本語ならではの格言も加え、人々の息災を願って鍾馗を描いていたのでしょう。日中の芸術文化に精通した鉄斎ならではの鍾馗図が、この「朱描鍾馗図」といえるでしょう。

(都甲さやか)

※図1は「雪村 奇想の誕生」展図録、東京藝術大学大学美術館、2017年。図2は王勇「中国の鍾馗と日本の鍾馗—画像イメージの比較を中心に」(『アジア遊学』73号、勉誠出版、2005年)。図3は『明四大家特展 文徵明』展図録、台北國立故宮博物院、2014年。図4は「高其佩画集」上海書画出版社、1989年。図6は浅野秀剛「葛飾北斎筆 朱鍾馗図幀」(『國華』1261号、國華社、2000年)より抜粋しました。



「展観のお知らせ」挿図



図1



図2



図3



図4



図5



図6

季刊 美のたより No.214

令和3年4月1日

発行 大和文華館